

## (二) 熊野筆の性格とその實態

一般に特殊産業といわれるものは、その土地にその産業に必要な原料や資材が得られない所に発達していることが多い。熊野筆はこの点では正に典型的といつてもよく、その発達の歴史や毛筆業そのものに特殊性が結びつくのである。

熊野筆の由来については前項で述べたところであるが、その発祥については勿論毛筆元祖と言われる先覚者の労にまたなくてはならないが、われわれはこの毛筆元祖を生み出し、それを受け入れることのできた社会的基盤を忘れてはならないのである。

熊野筆の全貌を紹介した「筆の都

熊野」が発刊されたのは昭和二十三年

年であるが、その頃の熊野町の戸数

は千七十五戸で、耕地面積五反未満

が八百十五戸、五反一町が二百四

十九戸、一町以上十一戸であり、一

反当り二石の收穫としても、一石を

一万円として一年に十万円以上の收

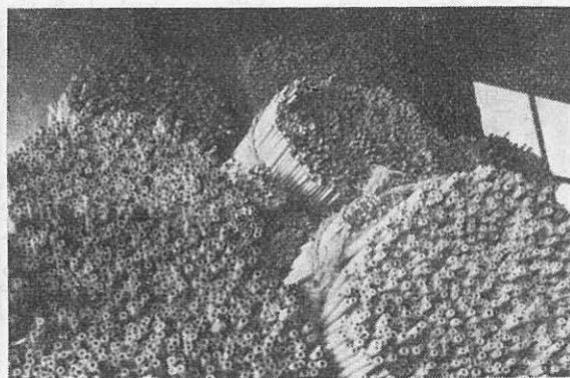
入のある家は四〇パーセントの二百

六十戸しかない。この十万円から必

要経費を差引いた額が五人家族の生

計費であるとすれば、熊野町に毛筆

業が発達した理由はわかるであろう



山の軸

町には原毛の店あり、軸の店あり、家内工業として作業を進める。繩で無雑作にしばつた軸の山に外来者は先ず驚かされる。

すなわち熊野筆の特色はこんなところからひき出せるのであり、たとえ副業として発達した毛筆業が専門化したとしても、実際は専門化してもいるが、そこに熊野の土地柄が見出されるのである。

今その特色と思われるものを列挙すれば

一、山間の地である為に比較的  
生活様式が低く低賃金で働くことができ、随

つて品質の良い毛筆を低廉、多量に生産することができる。

二、製産技術がも密で、熟練を必要とするから、特別な条件が備らない限り他町村に伝わらない。独占事業たる所以である。

三、毛筆業が家内工業である関係上、本町の人は幼少より毛筆生産に親しんでいるから、成人しての技術習得も速く、いわゆる技術者に事欠くことはない。熊野筆の基盤の固さはこゝにある。

四、簡単な設備で作業ができるから副業に最適である。特に筆の穂(毛の部分)を造ることは女性に恰好の作業である。

五、機械化による分業のできるところもあるが、筆の穂を造ることは正に名人芸でなければならぬところに、熊野筆の工夫と真価がある。

六、多数の業者が密集しているので大量注文にも容易に応じることができる。

七、熊野筆は熊野町の生きる力であり、その実績の上からも、進歩と改善に不断の努力を重ねている。そして書道教育に即して、また社会の進展に応じて、獣毛を生かすことを知っている。

毛筆業は今述べたように家内工業として成立しており、各家庭内に於て、筆の穂を造る者、軸を加工する者、糊入れをする者、ネームを彫刻する者等に分れ、それらの分業によつてできあがつた製品が当地で問屋と呼ばれる卸売商人の手によつて完成する。勿論これらの或る部分を一貫して作業し、卸売人に売却する場合も当然あるわけである。また販売方法としては卸売商人から東京等の大都市の業者に販売する方法もあり、各地の文房具店、学校等に直売する仕方もとられる。こゝに行商人の活躍する分野がある。

毛筆生産量は全国で九割弱を占めるが、その数量を年代を追うて見ると表のようである。画筆の生産も古く明治末期頃から本町では立道氏らの手によつて行われていたが、量産に入つたのは戦後である。(現在、全国の六割)刷毛については後に述べる。

毛筆生産数量 (単位万本)

年	数
大正 四	四、二〇〇
大正 六	五、八七八
大正 八	五、八五〇
大正 一五	四、三三〇
昭和 一	六、〇〇〇
昭和 四	六、四〇〇
昭和 六	七、〇〇〇
昭和 一	六、四〇〇
昭和 二	五、〇〇〇
昭和 三	四、五〇〇
昭和 四	四、五〇〇
昭和 一五	四、五〇〇
昭和 一六	五、〇〇〇
昭和 一七	四、〇〇〇
昭和 一八	三、〇〇〇
昭和 一九	二、五〇〇
昭和 二二	一、五〇〇
昭和 二三	一、五〇〇
昭和 二四	二、〇〇〇
昭和 二五	二、〇〇〇
昭和 二六	二、四〇〇
昭和 二七	二、八〇〇
昭和 二八	三、〇〇〇
昭和 二九	二、八〇〇
昭和 三〇	二、七三〇
昭和 三一	三、二八〇

備考 大正6年の数は芸備日々新聞(大正7.10.1)所載、大正8年と15年の数は熊野商工案内所載、その他は「筆の都熊野」及び毛筆事業協同組合の資料に依る

画筆生産数量 (単位万本)

年	数
昭和 二二	一〇〇
昭和 二三	三〇〇
昭和 二四	一、〇〇〇
昭和 二五	一、〇〇〇
昭和 二六	一、〇〇〇
昭和 二七	一、三〇〇
昭和 二八	一、四〇〇
昭和 二九	一、五九〇
昭和 三〇	一、七七〇
昭和 三一	二、四八〇

備考 毛筆協同組合の資料による

毛画筆生産価額

年	価	格	一	本	代	備	
大正 八年	二〇五	円	〇	三	五	毛筆	
大正 十五年	一五二	円	〇	〇	二	五	毛筆
昭和 十六年	一一〇	円	〇	〇	二	〇	毛筆
昭和 十九年	一〇〇	円	〇	〇	〇	〇	毛筆
昭和 廿六年	三五〇	円	〇	〇	〇	〇	毛画筆
昭和 卅一年	五七六	円	〇	〇	〇	〇	毛画筆

生産数量についての数字は適確には捕えにくい  
が、生産能力は年産毛筆一億二千万本、画筆七千万本と一応推定している。生産量の各年度による消長は、その社会的な背景を考えると、一月から三、四月の間が多いが、これは新学期に準備した出荷が多いこと、農閑期に於ける作業量の増大をもの話つてい

る。なお毛画筆の価格についても材料のよしあし、技術の程度等によつて異り熊野町全体の数字はわからないのが実際であろうが、およその数字を示すと次のようである。たゞし、この数字は一本の価格見積りに誤謬があるかも知れない。現在の販路は戦前より縮小されたが、なお日本全土は勿論台湾、北米等

にも輸出されている。画筆についてもその品質は世界の商品の間に伍して勝るとも劣らない成績を収めている。特に油絵筆の優秀さはドイツ、フランス、イギリ

月別毛筆生産数量 (単位万本)

年 月	毛筆	画筆	年 月	毛筆	画筆
二九一	三〇〇	一六〇	三、一	三五〇	一八〇
二	三五〇	二〇〇	二	四〇〇	二〇〇
三	三五〇	二〇〇	三	五〇〇	三〇〇
四	二五〇	一〇〇	四	四〇〇	三五〇
五	二〇〇	一三〇	五	三五〇	三〇〇
六	一〇〇	五〇	六	一五〇	一五〇
七	一〇〇	五〇	七	一三〇	一〇〇
八	一〇〇	八〇	八	二〇〇	一〇〇
九	二〇〇	二〇〇	九	二〇〇	二〇〇
一〇	二五〇	一五〇	一〇	二五〇	二〇〇
一一	二五〇	二〇〇	一一	二〇〇	二〇〇
一二	三五〇	二〇〇	一二	二五〇	二〇〇
三〇、一	三五〇	一七〇	三、一	四〇〇	二〇〇
二	三五〇	二〇〇	二	四五〇	二〇〇
三	四五〇	二五〇	三	四五〇	二〇〇
四	四〇〇	二五〇	四	四〇〇	二〇〇
五	三〇〇	二〇〇	五	三〇〇	二〇〇
六	一五〇	一〇〇	六	二〇〇	一五〇
七	一〇〇	八〇	七	一〇〇	一〇〇
八	一〇〇	一〇〇	八	一〇〇	一〇〇
九	二〇〇	一〇〇	九	一〇〇	一〇〇
一〇	三〇〇	一〇〇	一〇	一〇〇	一〇〇
一一	三〇〇	一〇〇	一一	一〇〇	一〇〇
一二	三〇〇	一〇〇	一二	一〇〇	一〇〇

備考 毛筆事業協同組合の資料に依る

ス等の製品とはきわだつて優秀であると伝えられる。日本各地の販売先は、東京二十パーセント、奈良二十パーセント、大阪十パーセント、愛知十パーセント、その他九州、四国、東北、北海道等が四十パーセントである。この各地の需要額にも変遷があり、昭和十六、七年頃は京阪神地区が五十パーセントを占めていた。

毛、画筆業種調

業種	毛筆		事業場
	細別	計	
業種	穂首製作業	二〇一	事業場
	管込業	一一	
	彫刻業	二三	
	美術軸製作業	二六	
	鞘製作業	二五	
	糊入業	三八	
	計	三〇四	
	穂首製作業	一四	
	金具加工業	一	
	木軸製作業	一	
計	一六		

こうした毛筆や画筆を中心としたいろいろな製作過程に従事する業者は上の表に示す通りであつて、勿論毛筆関係の業者が圧倒的に多数を占めている。然し、この数字はやゝ專業化したものに限られ、外に農閑期を利用してこの工程に参加する者は殆ど町民全域に亘つていることを見逃してはならない。

備考 昭和三十三年一月実施された工業調査による